KMJ THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL 2020；70：199～206

原　著

上州，上越地方の山岳信仰と修験者の医学的知識

三枝　里江[1]，戸部　　賢[1]，高澤　知規[1]，麻生　知寿[1]，齋藤　　繁[1]

1　群馬県前橋市昭和町 3-39-22　群馬大学大学院医学系研究科麻酔神経科学

要　旨

【目　的】 上州，上越地方では古くから山岳信仰が盛んであり，多くの修験者や行者が活動していた．その足跡を山中の遺跡や古文書で解析することは地域住民の医学・保健学的認識を理解することに有効と考えられる．

【方　法】 群馬県内の修験者・行者の活動拠点を踏査し，信仰対象とされた山体に設置された石碑や，参道の遺物，山麓修験道寺院の収蔵書を検証した．また貴重な記録物である「伝法十二法」から医学・保健学に関連する記述を抽出し，現代医学の観点から解析した．

【成　績】 群馬県内の多くの山頂に山岳信仰に基づく石碑が設置されていた．本山修験宗長見寺収蔵書には医学・薬学に関する古文書も含まれていた．「伝法十二巻」には医学，保健衛生に関する記述が 16 項目あり，創傷や熱傷治癒，咽喉頭異物除去など治療的観点に立つもの，感染症や身体的不都合を惹起するもの，懐妊・避妊・堕胎など産科的なものなどが含まれていた．

【考　察】 北関東地域では山岳信仰が根付いており，地域住民の健康観に影響を与えているものと想定された．

文献情報

キーワード：
山岳信仰
修験道
行者
呪術法
古文書

投稿履歴：
受付　令和２年２月25日
修正　令和２年３月23日
採択　令和２年６月４日

論文別刷請求先：
齋藤　繁
〒371-8511　群馬県前橋市昭和町3-39-22
群馬大学大学院医学系研究科麻酔神経科学
電話：027-220-8454
E-mail: shigerus@gunma-u.ac.jp

目的

北関東の群馬県，栃木県西部，新潟県南西部には脊梁山脈を形成する峰々と屹立した独立峰があり，古くから山岳信仰の対象となっていた．特に雷雲が発生しやすく，驟雨をもたらす独立峰は人知の及ばない神の住むところと捉えられ，渇水や水害を避けたい山麓の人々は折に触れ山体に祈祷を捧げ，信仰していたと考えられる．[1] そうした山域では山体を崇拝する民間宗教やそれらと仏教が融合した修験道が興隆し，山中での修行を経て祈祷等を行う行者や修験者が活動していた．北関東地域の修験道の本拠地としては男体山を中心とする日光修験が有名だが，[2] 群馬県内でも桐生地区の根本山や鳴神山，赤城山の鍋割山や鈴ケ岳，榛名山相馬山，妙義白雲山，子持山，迦葉山，上州武尊山，上野村三笠山などの多くの山体が信仰の対象とされてきた．[3] こうした霊峰への祈願には雨乞いや豊作祈願の他に疫病からの解放や多産祈願も含まれていたと想像される．

修験道では仏教経典を用いるものの，修験道特有の祈祷法や修行法は記述物の形ではあまり伝えられていない．これは，困難な修行により獲得した験力を秘密裏に温存するため，小グループの仲間の間での実地修練や口承以外の方策で継承することを好まなかった故と考えられる．こうしたことから，越後国高田で発見され宗教研究者宮家準により解読された「伝法十二巻」は非常に貴重な資料であり，江戸時代初期の修験者の知識や活動内容を記載内容から具体的に推察することができる．[4]

本研究では群馬県内の行者や修験者の修行が行われてい

a

b

c

d

図 1　群馬県内の修験道に関する石碑，参道設置物
a）榛名山相馬山の参道（廃道）に残置された鉄製鎖　b）赤城山鈴ヶ岳山頂の石碑
c）榛名山相馬山山頂付近の石碑群　d）子持山山頂の十二山神碑

たと伝えられている霊峰を探索し，現在まで残っている石碑や参道沿いの残置物，修験寺院の収蔵書を実地取材した．そうしたものの記載内容に保健・医療に関するものがあるかどうかも検討した．また，修験道指南書「伝法十二巻」の記載事項を検討し，上梓当時の修験者の医学・保健学的知識を現代医学の視点から評価した．

方法

群馬県内の根本山，鳴神山，赤城山鍋割山，鈴ケ岳，榛名山相馬山，妙義白雲山，子持山，迦葉山，上州武尊山，上野村三笠山の山頂を一般的に利用されていたと考えられる登山道，および歴史書等[3] に記載のある廃道から踏査した．また，群馬県立文書館に保管されている前橋市大友町本山修験宗長見寺の収蔵書を調査した．

宮家準による「伝法十二巻」の原文併記書[4] から医学・保健学的記述を抽出し，現在の医学書および医学論文の記載内容と比較検討した．

成績

踏査した 10 の山すべてにおいて，山頂や山頂の奥社へと続く参道に現在でも多くの石碑や役行者像が確認できた．霊験あらたかな神に近づく経路として，険しい道が好まれたのか，急峻で危険度の高い岩場などが積極的に登路に組み込まれており，人力で設置するには相当な労力を要したと思われる太い鉄製鎖などが古木の根に食い込むように今も残されていた（図 1a）．特に鈴ケ岳や榛名山相馬山には数十の石碑や石像が安置されており，現在まで続く信仰の深さが伺われた（図 1b，c）．子持山の山頂には多産祈願と考えられる十二山神の巨大な石碑が設置されていた（図 1d）．疾病治癒を祈願したことを伺わせる「薬師」の文字を含む石碑は榛名山相馬山で複数確認できたが，その他の各所でも散見された．長見寺収蔵書のうち「産前産後秘伝ノ書（1848 年）」（図 2）ならびに「備荒草木図（1834 年）」（図 3）には漢方処方の記載があり，「諸秘法作法之大事（1633 年）」，「牛頭天皇宮祭文（1834 年）」，「病者祈祷観（作成年不詳）」，「死霊退散当病平癒（作成年不詳）」，「修験道極秘分七通聞書（作成年不詳）」，「験者作法（作成年不詳）」には病根を断つ呪詛の文言等の記載が見られた．

「伝法十二巻」の記載内容の多くは祈祷法に関するもので，呪詛で唱える文言や祭壇・護摩壇の配置，祈祷札の表記，呪詛対象の人に見立てた藁人形の形態などであった．しかし，当時の修験者達の活動が現代の医学的観点から合理的なものであったかの検証を可能にする，創傷治癒や感染症の伝搬，飢餓対策，受胎・避妊・堕胎などの記述も含まれていた．医学，保健衛生に関する記述は別表のとおり 16 項目あり，それらはすべて巻 1 と 3 に収められていた（表 1）．創傷や熱傷治癒，咽喉頭異物除去など治療的観点に立つものが 4 項目（巻 1−7，17，18，39），感染症や身体的不都合を惹起するものが 4 項目（巻 1−34，3−67，70，71），懐妊・避妊・堕胎など産科的なものが 5 項目（巻 1−

図２　長見寺収蔵「産前産後秘伝ノ書」

図３　長見寺収蔵「備荒草木図」

表１　「伝法十二巻」の保健・医療に関する記述

原本項目	記述事項	タイトル	原　　文	解　　釈
巻 1-7	熱傷処置	湯火焼之術	猿沢之池之邊リニ大蛇アリテアチカマ入道追テハ海ニ入ケリ 三唱シテ篠之葉ニ塩水ヲ付テ痛所ニカケ術スル也	呪文を三回唱えて篠の葉に塩水を付けて痛む所にかける
巻 1-17	齲歯治療	治虫喰歯痛術	其人之歯之図形書干板也数各能書之男ハ左女ハ右之方ヨリ何枚目ト問ヒ，歯痛ノ根ニ穿穴竹釘ヲサシ，五字明七返唱，了テ早ヤ平癒タラント患人ニ申伝也	歯痛の根元に穴を竹釘で穿ち，胎蔵界大日如来の真言を 7 回唱える
巻 1-18	咽喉頭異物除去	抜喉之魚骨術	掌中ニ賦ヲ書呑之而　歌三唱　山寺之臼之腰迄月サシテ杵ノヲレニテ衣ヌク也	掌の中で漢詩を書いて之を呑み，歌を 3 回唱える
巻 1-29	寝言を言わせる術	令人寝言術	藁ヲ一把枕ニサセベシ，先葦毛馬之爪ヨリコツホリト自然ニヌケタル土ヲ取入器ニ置枕元ニ同其馬ノ踏ヲ臥上ニツル也　置テ枕ノ藁一筋抜テハ門々々スル，右ノ方ヨリ可門也	藁束の枕で寝せて，馬の爪から落ちた土を入れた器を枕元に置き，馬の沓を上に吊るし，藁を一本づつ抜きながら右の方から問いかける
巻 1-30	懐妊の術	求子術	立春ノ後始テ降雨ヲ請テ夫婦各一盃宛可呑也，又戊子ノ日，巳酉日ニ可交也，五月・巳・亥ノ日半夜ニ可交月水収リテ後六日ノ中ニ可交也	立春の後始めて降雨があってから一盃呑巳，月経後六日目以内に交合する
巻 1-31	避妊の術	不求子術	月水収リテ後可隔六日中交時麻ノ油ヲツケテ交レバ無子	月経後六日以内の交合でも麻の油をつければ避妊できる
巻 1-33	避妊の術	不求子術	可交以前ニ桂心ノ末ヲ茶一服ホド与也　秘事也，又咒日所世界如虚空如蓮花不着水	桂心の抹茶を飲み呪文を唱える
巻 1-34	苦行もしくは錯乱	鼻シミサスル術	深山ノ蚯蚓ヲ陰干ニシテ香ニタク也	深山のみみずを陰干しして炊く
巻 1-39		治構太刀之疵術	久キ古暦ノ黒焼良也　咳嗽ニモ又妙也　疵ニハ可付也	古い暦を焼いた炭が良い　咳嗽にも良い　傷に付けて良い
巻 3-64	人を狂わせる術	狂亂法術	人頭馬頭猿頭猿膽，此四種以赤色之錦裸之備于壇，十七日之間不動慈救ノ咒，文殊ノ真言各百返日二三度宛誦之畢，以五色之糸結之，向其人時不嫌人也袖中ニテ入掌可握之，強握則狂乱ス弱則亦弱也，一時狂亂也可秘々々	人，馬，猿の頭と猿の肝を錦の袋に生で入れ，十七日間，不動，文殊の真言を百回繰り返す祈祷を日に 3 度唱える．それを糸で結わえて袖に入れ，相手が来たら強く握る．強く握るとすぐ狂い，弱く握ると弱くなる．一時の狂乱法で，秘密にする
巻 3-67	髪病の術	髪病ノ薬術	同ヒルヲムシマキニシテ細末シテフリ掛ル　即カタマルオトスニハシホ湯ニテ洗フ	ヒルを蒸して粉にして髪に振り掛けると固まり，塩湯で洗えば落ちる
巻 3-70	病を患わせる術	患疫癘術	設置節分之大豆而又患疫人之設衂血示紙ニ疫癘諸人ニ移入ノ衂血良，常ハ竹筒ニ入，蓋シテ九字切置也　節分ノ大豆與ト是裸紙ニ敵之門ニ挟之大豆一粒裸則一人患乃至十粒裸則十人患之也　紙ニ歌ヲ書テ，右ノ二種ヲ裸也，歌ニ曰　　疫病ヲ呼而ゾ入ル此家之人於悩セ疫病ノ神如斯スレハ患フルコト疫ヲ無疑也	疫病の患者の血で歌を書き，大豆の粒を包んで敵の家の門に挟む．一粒で一人，十粒で十人を患わすことができる．
巻 3-71	盲にする術	盲眼ノ薬術	水晶藜蘆真蛇黒ヤキ各等分ニシテ三種細末シテ向敵ニ而掻掛ノ也，盲ルコト無疑　治スニハ者蛇脱煎シテ洗也風雨ニアタラヌ堂ノ下力抔ノ良 又方　狼糞黒焼三分　水銀一分　猪ノ怒毛黒焼　斑猫クサラシテ　明礬一朱細末シテ入筒而打也，自我ノ耳口目等ニハ塗硫黄而去毒	水晶と葱，蘆，蛇を黒焼きにして，その粉末を敵にかけると盲目になる．蛇の抜け殻を煎じたもので洗うと治る．狼の糞の黒焼き，水銀，猪の毛の黒焼き，ハンミョウ（虫）の腐敗物，明礬を粉にして筒に入れたもので撃ってもよい．自分の目耳口は硫黄を塗ると毒が取れる．

原本項目	記述事項	タイトル	原　　文	解　　釈
巻 3-72	堕胎の術	堕胎ノ薬術	鮫子黒焼四分肉桂四分胡椒四分丁子二分水銀五分細末シテ茶ニ服程白湯ニテ下ス効如神 又方　蛇脱不中雨露七切ニシテ大麻子皮ヲ去十二粒白木ノ鉢ニテ砕合以清水クツロゲテ與之 又方　鶏冠之血ニ胡麻之油少計入與之妙也 又方　　唯授一人　川芎・香附子各四分巴豆皮ヲ去黒焼一分土龍黒ヤキ八分　車前子五分右末シテ空心ニ茶二服余以白湯下ス之神効アリ	水銀やその他の様々な漢方生薬などを混合し内服することで堕胎ができる．又方と合わせて 4 法が紹介されている．
巻 3-74	堕胎の術	胎堕ノ薬術	牛膝根手一束ニ切リ先キヲ尖ラシ王門ノ子宮ノ中エサシコミ置ク，妙神ノ如シ 牛膝 葉茎トモニ胡麻ニ以テ茎四角ナルモノナリ　オロシ姥ノスル術ナリ 催生湯　前方ニテ必下ル，若シ女寒立チ，甚タフルヒ子ツ來ラハ催生湯ヲ用ユヘシ　桃仁　赤芍薬　牡丹皮　茯苓　肉桂　冬葵子　附子　各等分　人参少加物ノ下リ切レハ，寒熱トモニナシ 早ク肥立テント思ワハ芎帰湯ヲ用ユヘシ　川芎　當帰　各等分 同方胎堕　牛膝一両　マチン小半両　白茯苓同　黄檗半両　苦辛六分　白芷同　甘草少　右七服ニシテ一日ニ一服ツツ七日呑マシム之，煎薬也 同方　蒲黄一両　五倍子粉一両　白礬粉半両焼テ　右七服ニシテ一日ニ一服ツツ七日中酒ニテ呑マシム之 同方符術　陰陽家秘密極秘也　此ノ符三粒米三粒合シテ一服トス　右七服拵ヒ　一日ニ一服ツツ七日中朝ニ水ニテ呑マシム之ヲ　欲サハ強ク用ント，早朝，日中，夕日，食前ニ日ニ三ド呑マシム之ヲ，此符七日中廿一服拵ヘ可シ遣ス但シ此符呑ム中チ女交リ不浄ヲ禁ス	牛膝の根を 1 束切り，先を尖らせて，子宮の中に差し込んでおく．「おろし姥」が用いる手技である．堕胎後に褥婦が寒気を訴えた場合は催生湯を用いる．桃仁　赤芍薬　牡丹皮　茯苓　肉桂　冬葵子　附子　各等分　に人参を少量加えたもので解熱する．芎帰湯（川芎　當帰　各等分）は早期回復が期待できる． その他の薬術として牛膝とマチン，白茯苓，黄檗，白芷，甘草を混合するもの，蒲黄，五倍子粉，白礬を酒と合わせて服用するもの，極秘法として呪い札と米の混合物を繰り返し服用する方法がある．
巻 3-76	食べずに生きる術	不食永生薬術	糯米白米一斗井籠ニ入レ，百度蒸シテ而一握リ宛毎日呑ム之ヲ，三十日以水ヲ用ユ之一生ノ中チ不食シテ生ク 黒大豆能ク蒸而一日食物不喰，翌日ヨリ右豆ハカリ喰ヒ，外ノ食物不喰，渇寸ハ水ヲ呑ム，一年程スレハ食物不喰仙トナル 黒大豆五合黒胡麻三合，一方ニ麻子ト有リ一夜水ニ浸シ，蒸スコト三度而能ク干シ之，以テ手ヲモミ皮ヲ能ク去リ，搗研拳ノ大サニツク子甑ニ掛ケ，戌ノ刻ヨリ子ノ刻迄蒸シ，翌寅ノ刻ニ取リ出シ，日ニ干シツケテ食ス，拳ノ大サ一ツ食ヘハ七日，二ツ食ヘハ四十九日，三ツ食ハ三百日，四ツ食ハ二千四百日不飢ヘ　亦麻子ト胡麻ニテモ作 糯白米二三合イリテ　生臘二両鍋ベニ入レ溶化シ右ノ米ヲ入レ，再ヒ炒，臘ヲ乾カシ，ヒダルイト思フ時，少シ宛喰フ之ヲ，数日不飢　欲ハ喰ハント食ヲ胡桃肉二ツ喰ヒ下スベシ 黄芹赤石脂竜骨各三匁，防風一匁五分川芎一匁，以上炒リテ而石臼ノ中ニテ一千杵ヲ搗　蜜丸弾子ノ大キサニス要シテハ行ンコトヲ遠路ヲ，飽喫シテ食ヲ一頓服シテ一丸ヲ可シ行ク五百里ヲ 貫首（ワラビノ子）一斤毛ヲ去リアラクキザミ黒豆一升合シテ水ニ煮ルコト甚シフシテ豆ノ熟シタ時取リ出シ，日ニ乾シ，貫首ヲ去リ毎日豆五七粒食スルニ，百草木葉ヲ食シテ甘味有リテ不飢飢饉年ニ用ユ	糯米，白米を一斗籠に入れ百回蒸して一握り毎日呑み，水で 30 日用い，これで一生食べずに生きる． 黒大豆を蒸し 1 日は食べず，翌日から計りながら食し，他のものは食さず，喉が乾けば水を呑む，1 年で食物が不要な仙人となる． 黒大豆と黒胡麻，麻を水に浸してむし，皮を取り搗き研いで拳の大きさにして蒸し，干して食す．1 つで 7 日，2 つで 49 日，3 つで 300 日，4 つで 2400 日飢えない．麻子と胡麻でも作れる． 糯米，白米と臘を鍋で溶かして乾かし，空腹（ひだるい）時に少し食べると数日飢えない．さらに食べたい時は胡桃肉を 2 つ食す． 黄芹，赤石脂，竜骨，防風，川芎を炒り搗き団子にすると，遠路を喫食なしで行ける．一頓服一丸で五百里を行くことができる． 貫首（ワラビノ子），黒豆を水でよく煮，日干しして，貫首を取り出し，毎日豆 57 粒食すると，百草木葉を食しても甘味を感じ，飢饉の年に用いる．

30，31，33，巻 3−72,74），心理・認知などに関するものが 2 項目（巻 1−29，巻 3−64），栄養に関するものが 1 項目となっていた（巻 3−76）．

考察

○山岳信仰および修験道とは

山岳信仰では山自体を信仰の対象とし，その奥深くまで分け入って修行することによって，神秘的な力を得られると考える．そして山での修行で得られた力で自他の救済を目指している．山岳信仰そのものは民間宗教として各所で様々な形態で存在するが，そのなかで仏教と融合し組織的に統合されたものは特に修験道と呼ばれている．修験道は長い歴史を経て，現在は本山派，当山派の 2 系統が確立した組織とされている．より民間宗教的色彩の強いものとして，木曽御岳を特に意識する御嶽講や羽黒山を中心とする羽黒修験，富士山を崇める富士講なども全国に広まった山岳信仰であり，それぞれに特徴や差異はあるものの，一般

的には類似の宗教形態と捉えられている．この本邦特有の修験道等は，自然の中でも特に「山」を神聖視してきた日本人古来の山岳信仰であるが，「人知の及ばぬ力に祈る」という共通項から，仏教や道教や儒教などの外来の宗教，神道や陰陽道，各地の民間信仰などと様々な程度に合体し現在の形をとるようになった．修験者や行者が山伏と呼ばれるのは，山中で臥し困難な修行を行うことに由来するが，修験道を中心とする仏教的色彩の強い山岳信仰の教義や修行では，仏教の密教派の手法や慣習を取り入れている．[1]

修験道では，山を歩く，礼拝する，滝に打たれる，坐禅をするなど，身体を使った実践修行を行い，自分の体の感覚で「悟り」を目指す．自然の聖なる力，超自然的な神仏の力「験」を修めた者という意味で修行者を「修験者」とも呼ぶ．実践的な修行は，山中だけでなく，里に降りての護摩焚き，雨乞いや病気平癒の加持祈禱，衆生の願いに応えるための様々な活動を通じても実践される．[5]

○修験道の歴史[6]

修験道は8世紀ごろに大和葛城山で活動していた役小角が開祖とされている．

その後奈良時代になると，仏教僧の中に山林修行を行う者が多数現れ，更に平安期に入り密教が日本に伝えられると，密教の僧侶が主導して仏教の一派として修験道を広めていく．現在の修験道は当山派と本山派の二派に大別されるが，それぞれ真言密教僧と天台密教僧の修行形態として捉えられる．

奈良時代には，国家から危険視されて規制の対象となったが，真言密教を伝えた空海や，天台密教を伝えた円仁や円珍よって密教が隆盛を迎え，平安時代になると，験力，呪力，現世利益が期待されて社会的地位が高まった．

鎌倉時代になると仏教僧侶でない山林修行者達が，修験道の集団を形成するようになり，神道や陰陽道，土着の信仰的慣習を取り込んで民衆の支持を受けるようになる．古典的な活動拠点は，葛城山・大峰山・金峯山・熊野三山などだが，富士山・羽黒山・彦山・御嶽山・大山・白山など全国各地に独自の拠点が発生し，それぞれの教義や修行法に基づいた組織を形成してゆく．しかし，江戸時代になると土着の修験道は幕府により真言系の当山派か天台系の本山派の何れかの派に所属させられることになる．

明治政府は国家神道を統一的な国家宗教とする観点から，神道を含むものの様々な宗教の混合体である修験道は容認せず，明治元年（1868）から明治5年（1872）にかけての太政官達によって，公式には廃止される．しかし，地方の人々の信仰心や祭祀慣習は各所で継続し，修験道組織も真言宗醍醐派や天台宗寺門派として仏教一宗派として存続する．そして，第二次世界大戦終結すると修験道諸流は，それぞれが宗教法人格を取得するなどして，一個の独立した宗教として復活を遂げる．

○群馬県の山岳信仰と保健・医療との関連

実地検証でも多くの石碑や長年に渡って使用された梯子，鎖などが確認できたことから，群馬県内においても修験道を中心とする山岳信仰は広く受け入れられており，多くの地域住民が信仰対象である山体の頂を目指して参詣したことがうかがえる．病難を癒し，禁厭を司る霊妙神を祀った霊神石碑は各所で散見され，榛名山相馬山には10を超える霊神石碑や地蔵像が確認できる．この山麓では疫病や乳幼児死亡に悩まされた時期が繰り返しあったことが想像される．

子持山の山頂にある十二山神は12のつく日に木を植える山の神という意味のほかに，年に12人の子供を産む神という意味もあると言われており，多産の象徴とも考えられている．[7] この山自体の山名が「子持山」であること，小野子山を挟んで西方7 kmには十二ケ岳があることなどからも，この地方では多産が強く祈願されてきたものと思われる．

長見寺は修験道寺院であり，修験道が廃された後，本山派の修験宗寺院として宗教活動を継続している．収蔵書は群馬県立文書館に移管されているが，その中の「産前産後秘伝ノ書（1848年）」は，名称のとおり，産前産後の療養に効果があるとされる漢方薬処方を紹介している．「秘伝」とあるが，比較的当時広く認知されていた本草学の内容と考えられる．また，「備荒草木図（1834年）」は，絵図入りの飢饉時の食用植物図鑑であるが，麦門冬等の漢方処方に用いられる植物の記載がある．修験者が当時の漢方医学を参照して活動していたことが伺われる．一方，「諸秘法作法之大事」，「牛頭天皇宮祭文」，「病者祈祷観」，「死霊退散当病平癒」，「修験道極秘分七通聞書」，「験者作法」は病疫退治の呪詛の文言を含んでおり，伝法十二巻と同様に，修験道においては主たる祈祷の一つとして疾病治癒があったことを反映していると考えられる．

○「伝法十二巻」の記述

「伝法十二巻」は越後国高田の本山派修験者，金剛院の空我が寛文年間の1667−1670頃に書いた修験道伝承書である．12巻13冊（第8巻のみ上・下2冊に分冊）で構成されており，携行して現場において修験者が用いたと思われる体裁をとっている．上越地方，特に群馬県と県境を接する南魚沼郡から頸城地方は，巻機山，八海山，苗場山から妙高山と，霊山と呼ばれた山々に囲まれており，山岳修験が極めて盛んであったと伝えられている．金剛院は京都の聖護院を中心とする本山派に属したが，京都醍醐三宝院を本寺とする当山派や山形県の羽黒修験の影響も及んでいると宮家は分析している．当時から修験道では本山から儀礼等が伝授されるものではなく，修験者同士の師弟関係を基盤に各所において独自に成立，伝承されていたと考えられている．「伝法十二巻」の記述内容も様々な地方から伝来したもの，あるいは現地において独自に成立したものを整理

統合して記載していると思われ，江戸時代初期に実際に現地において行われていた祈祷や呪術を反映していると想定される.[4]

「伝法十二巻」の記載内容の多くは祈祷法に関するものである．その他の宗教における記載物でも儀式や拝礼法の記載はあるが，それらが現世の苦難を受容して長期的な人間社会の安寧や平和を求める文言に満ちているのに対して，民衆の宗教である修験道の記録では，雨乞いや豊作祈願などの短期的な現世利益を求める記載が多い．嫌悪する人に不幸をもたらすための呪詛など，嫉妬や怨恨などの素朴な人間感情に対応する事項も少なからず含まれていることは興味深い.

「伝法十二巻」の医学，保健衛生に関する記述には，創傷や熱傷治癒，咽喉頭異物除去など治療的なもの，感染症や身体的不都合を惹起するもの，懐妊・避妊・堕胎など産科的なもの，心理・認知などに関するもの，栄養に関するものがある.熱傷治癒に関しては「篠の葉に塩水を付けて痛む所にかける」とあり，篠笹に含まれるフェノール類やアルデヒド，アルコールの抗菌作用に期待しつつ，創部の感染防止を意図したと考えられる．現在も寿司桶に笹の葉を置いたり，笹で食物をくるんだりすることから，現代まで伝承されている抗菌法と言える.[8] また，塩水洗浄は組織液と浸透圧の近い電解質液で組織融解を防止しつつ洗浄することを意図しているとも想像される（巻 1−7）．刀傷への対応としては，炭をつけることを指南しており，こちらも燃焼直後の炭の無菌性に期待して創部保護に用いたと考えられる（巻 1−39）．咳嗽にも良いとあるが，炭の塵埃は気道に良くないことから,[9] 経口摂取による消化性潰瘍予防や解毒作用を意図したのかもしれない．なお，現在でも食用の炭は生産されており，消化器症状の鎮静化などが漢方医学上の効能として取り上げられている.[10] 齲歯治療では「歯痛の根元に穴を竹釘で穿ち」とあり，痛い歯の根元に竹釘で穴を開けて排膿させたとも考えられる（巻 1−17）．また，喉の魚の骨を抜くためには「漢詩を書いて之を呑み」との記述から，嚥下動作と紙の通過で喉に刺さった魚の小骨を除去しようとしたととれる（巻 1−18）.

敵や，恨みを持つ対象に感染症を引き起こす方法として，疫病の患者の血で歌を書き，大豆の粒をその紙で包んで住居に差し置くという術が記されている．大豆一粒で一人，十粒で十人を患わすことができるとあり，具体的な記述となっている．感染症患者の血液中の病原体を大豆の蛋白栄養で増殖させつつ敵の家に移入する意図と考えられる（巻 3−70）．「盲眼ノ薬術」では「水晶と葱，蘆，蛇の燃焼後粉末を敵にかけると盲目になる」とある．別法として，「狼の糞の黒焼き，水銀，猪の毛の黒焼き，ハンミョウ（虫）の腐敗物，明礬を粉にして筒に入れたもので撃つ」という方法も紹介されている.水晶の石粒や刺激性のありそうな灰，水銀，カンタリジンという毒素を持つ昆虫,[11] 眼刺激性のある硫酸カリウムアルミニウム（明礬）[12] などの混合物は明らかに眼に入ると危険と考えられる．解毒法も併記されており，「炭の入った水で洗う」，「硫黄を塗る」などが紹介されている．洗浄による直接的な毒物の除去に加え，炭素や硫黄の静菌，殺菌的な効果を期待したと考えられる（巻 3−71）．興味深い嫌がらせとして「髪病ノ薬術」が記されている．これは，「ヒルを蒸して粉にして髪に振り掛けると固まり，塩湯で洗えば落ちる」というもので，目的は不明だが，術の被害者が迷惑なことは間違いない．別法として「雁の糞，黒猫の糞，雀卵，各陰干にして細末して付てかたまる，飼鳩の糞末して湯に入れ洗う」や「鶏糞の黒み一薬にてかたまる，白みにて洗て良」という術も併記されており，怨恨を持つ対象に災をもたらしたい民衆の呪詛要望が少なくなかったことを想像させる（巻 3−67）．もう少し軽い嫌がらせとしては「鼻シミサスル術」があり，「深山のみみずを陰干しして炊く」とあることから，ミミズの干物を燃焼させた時の悪臭やタンパク質を燃焼させたときに発生する硫黄酸化物の刺激によって鼻汁分泌を誘発したと考えられる（巻 1−34）.

産科的な記載は 5 項目あり，懐妊法が 1 つ，避妊法と堕胎法が各 2 つとなっている．多くの子供を持つことが生産力，労働力を確保するために望まれた時代であることから，十二神（毎月子供を産む神様）信仰にもみられるように懐妊への期待は大きかったと思われるが，一方で高い乳児死亡率や飢饉時の口減らしの必要性から，望まれぬ妊娠も少なくなかったものと思われる．「求子術」は懐妊の確率を高める術で，「立春の後始めて降雨があってから一盃呑巳，月経後六日目以内に交合する」とあることから，気候が温暖になったところで少量の飲酒で緊張を解き，排卵日の少し前に交合することで受胎率が高まるという経験則があったものと思われる（巻 1−30）．一方「不求子術」では避妊法を説いており，月経後六日の交合でも麻の油の殺精子効果で避妊できるという方法と肉桂の内服が紹介されている．現在でも，オリーブ油に殺精子効果があるという報告[13] や，肉桂（シナモン）の皮（桂皮）である桂心の主成分 Cinnamaldehyde が子宮収縮抑制作用をもつなどの報告[14] がある（巻 1−31，33）．堕胎法としては物理的な手技によるものと薬物内服によるものが紹介されている．「牛膝の根を 1 束切り，先を尖らせて，子宮の中に差し込んでおく」という当時の堕胎の専門家「おろし姥」が用いていた手技が図入りで記されている．ここで登場する牛膝は関節痛対策や利尿，血行促進を目的に漢方薬として用いられる生薬のもととなる植物で，ここではその茎を尖らせて子宮に貫入させておくという直接的な方法に用いられている.[12] 当時から産褥熱による後遺症が懸念されていたのか，褥婦が発熱したときには婦人科疾患に広く用いられる芍薬や茯苓，川芎，当帰などを用いて解熱させることも併記されている（巻 3−74）.[15] なお，農民文学の代表作とされる長塚節 1910 年作「土」では，主人公の妻が堕胎のため自身で酸漿の根で卵膜を破り，その後破傷風で死亡するが，場面とされる茨

城県を含む北関東の農村部では明治に至るまでこうした手技が認知され，実施されていたと思われる.[16] また,「伝法十二巻」には薬物（毒物）の内服による堕胎も複数紹介されており，水銀やその他の様々な漢方生薬などを混合し内服することで堕胎ができるとある．処方のレシピは又方として,巻 3−72 に 4 法,巻 3−74 に 3 法が紹介されている.[12,17] ストリキニーネを含有するマチンを内服させるものは薬学（毒性学）的にも効果があったと考えられるが,[18-19] 呪札と米の混合物を繰り返し摂取する方法などは呪術的な範囲をでないものである.

心理・認知などに関する記述のなかで「令人寝言術」は寝言を言わせる術で，浅い睡眠中の相手から本音や秘密を探り出す方法と考えられる．「藁束の枕で寝せ,就眠後に土埃の多い環境として，藁を一本ずつ抜きながら問いかける」という手法は，眠りを浅くして繰り返し弱い刺激とともに質問をすることで，寝ぼけながら自白させることをねらったものと想像される（巻 1−29）．「狂亂法術」は敵を発狂させる術と読めるが，発狂しそうになるほどに驚愕させる術と解釈した方が合理的と思われる内容である.具体的には,生の動物の頭や肝を 17 日置いて,それを詰めた袋を敵のそばで強く握るというものだが，常温で放置した動物の臓器は相当な悪臭がすると思われ，それを突然嗅がされたものは一時的には狂乱するほどに不快となったと考えられる（巻 3−64）.

栄養に関する記載は 1 項目にまとめられているが，6 種類のレシピが同項目の中で紹介されている．食事なしで長期間生存する仙人となるためのレシピととれるものが4 法,長距離移動時の持久食的なものが 1 法，飢饉対策としてのものが 1 法である．いずれも米や大豆，漢方薬成分を混合するものだが，個体維持や運動で消費する熱量を糖質や炭水化物，脂質などの直接的な栄養素を長期間摂取することなく補給できるものではないので，絶食以前に体に蓄えられた脂肪や筋肉成分を徐々に代謝してエネルギーに変えていくケトン体代謝を補助する方法と考えられる．羽黒修験の木食上人が長い期間をかけて体組織を消費し，腐敗しにくいミイラ化を目指したことが知られているが,[2] 修験者の間では消費カロリーの少ない体への改変法，食事法が伝承されていたものと考えられる（巻 3−76）．尚，同様の携帯食は飢渇丸，兵糧丸などの名称で忍術書にも記載されている.[20-22]

以上のことから，北関東から上越にかけての地方では山岳信仰としての修験道や御嶽講が盛んであり，現在に至るまで多くの建造物や社会的慣習が残されてきたことが確認された．呪詛を中心とする祈祷法や社会慣習には保健・医療に関係するものも少なくなく，それらには現代医学の知識に照らしても合理的と考えられるものが複数含まれている．仏教書の保健・医療関係の記載が健全な心身の養生法に重きを置いているのに対して,[23] 修験系古文書の記載事項は民衆のより具体的，個別的な問題対処に焦点が当てられていると考えられた.

参考文献

1. 田中利典．修験道入門　集英社新書．東京：集英社，2014: 14-47.
2. 五来　重．山の宗教　修験道案内　角川ソフィア文庫．東京：角川書店，2009: 77-102.
3. 久保康顕，佐藤喜久一郎，時枝　務．山伏の地方史：群馬の修験道．前橋：みやま文庫，2017: 23-32.
4. 宮家　準．近世修験道文書　越後修験伝法十二巻．東京：柏書房，2006: 752-778.
5. 和歌森太郎．山伏　入峰・修行・呪法　中公新書．東京：中央公論新社，1964: 61-76.
6. 宮家　準．修験道　その歴史と修行 講談社学術文庫．東京：講談社，2001: 29-132.
7. 川口謙二．日本の神様読み解き事典．東京：柏書房，1999: 488-490.
8. 関　一人．ササの葉には防腐効果がありますか？　林産試だより　2006; 11: 11-12. https://www.hro.or.jp/list/forest/research/fpri/dayori/0611/5.htm（2020 January 2　閲覧）
9. Obiebi IP, Oyibo PG. A cross-sectional analysis of respiratory ill-health among charcoal workers and its implications for strengthening occupational health services in southern Nigeria. BMJ Open 2019; 9: e022361.
10. 山岸義浩．竹炭パウダーの効果と使い方．須崎：竹虎，https://www.taketora.co.jp/special/bamboocharcoal.html（2020 January 2　閲覧）
11. 梅谷献二．虫を食べるはなし 第 14 回毒薬『はんみょう（斑猫）の粉』の正体．公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会　https://www.jataff.jp/konchu/hanashi/h14.htm（2020 January 2　閲覧）
12. 根本幸夫．漢方 294 処方生薬解説 その基礎から運用まで．東京：じほう，2016: 239-240.
13. Fan Y, Chen N, Wang M, et al. *In vitro* study evaluating the instantaneous treatment of ozonised olive oil on human sperm. Eur J Contracept Reprod Health Care 2018; 23: 147-153.
14. Sun L, Liu LN, Li JC, et al. The essential oil from the twigs of Cinnamomum cassia Presl inhibits oxytocin-induced uterine contraction *in vitro* and *in vivo*. J Ethnopharmacol 2017; 206: 107-114.
15. 岡田　稔．原色 牧野和漢薬草大図鑑．東京：北隆館, 2002: 106-108.
16. 長塚　節．土．東京：新潮社，1950: 57-58.
17. 伊沢一男．薬になる野草・樹木 ガマ．東京：主婦の友社，2008: 98.
18. 結城　凛．忍者　最強伝説．東京：ダイアプレス，2015: 60-61.
19. 中島篤巳．解説・解読，藤一水子正武著「正忍記」．東京：新人物往来社，1996: 94-97.
20. Takazawa T, Tobe M, Kimura M, et al. Physiological and pharmaceutical knowledge in “Ninja”Society: Suggestions for modern anesthesiologists and intensivists. J Anesth Hist

2018; 4: 209-213.
21. 中島篤巳．訳注「完本　万川集海」．東京：国書刊行会, 2015: 264.
22. 佐藤香澄．歴史群像シリーズ特別編集：図説　忍者と忍術．東京：学習研究社，2007: 70-77.
23. 戸部　賢，齋藤　繁．曹洞禅：道元の健康観．日本医史学雑誌　2019; 65: 482-494.

Mountain Worship in Gunma, Joetsu Area and Medical Knowledge among Shugen–monks

Rie Mieda[1], Masaru Tobe[1], Tomonori Takazawa[1], Chizu Aso[1] and Shigeru Saito[1]

1 Department of Anesthesiology, Gunma University Graduate School of Medicine, 3-39-22 Showa-machi, Maebashi, Gunma 371-8511, Japan

Abstract

Purpose: Historically, mountain worship was popular in the Gunma and Joetsu areas.　Many monks called “Shugen-ja” were active in the area.　Studying their practices and knowledge can help us understand medical and health consciousness of local residents.

Methods: Stone monuments and statues in several mountains in Gunma prefecture, known as sacred zones, were surveyed on-site.　Classical documents stored in a Shugen temple, “Chouken-ji”, were examined for medical and pharmaceutical information.　Contents of the ancient documents called “Denpo-juunikan” were examined and compared to modern medical knowledge.

Results: There are many stone monuments in the mountains in Gunma prefecture.　The Chouken-ji documents contained several pharmaceutical suggestions.　In the “Denpo-juunikan”, there are 16 sections describing medicine and/or health related issues.　These descriptions included treatments for injures and burns, techniques for pharyngeal foreign body removal, methods to propagate infection or cause physical symptoms, and obstetric intervention and treatment regarding fertility, contraception and abortion.

Discussion: Mountain worship has been popular in the Kitakanto area since ancient times, and its practitioners have significantly influenced the medical and health consciousness of local residents.

Key words:
Mountain Worship,
Shugen-do,
Gyo-ja,
anathema,
antient-document